



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	The making of Karafuto repatriates [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	BULL, JONATHAN EDWARD
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(法学)
Dissertation Number	甲第11184号
Issue Date	2014-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/55426
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	JONATHAN_EDWARD_BULL_review.pdf, 「審査の要旨」



学 位 論 文 審 査 の 要 旨

博士の専攻分野の名称 博士（法学） 氏 名 ジョナサン エドワード ブル

主 査 教 授 山 崎 幹 根
副 査 教 授 空 井 護
副 査 教 授 眞 壁 仁

The making of Karafuto repatriates (樺太引揚者のイメージの形成)

審査対象論文は、戦後、樺太からの引揚者がどのように戦後日本社会に統合されたのかを歴史的に検討し、特に、終戦時から 1970 年代までの時代において、引揚者団体の指導者層がいかに「樺太引揚者」というイメージを形成してきたのかに関して焦点を当て、これを実証的に考察した政治史研究である。

まず序章において、和文、英文の先行研究を整理したうえで、本論文の意義を明示している。引揚に関する先行研究は大半が満州を事例としており、主として、マクロレベルで日本政府やメディアの役割に着目した研究や、個々の人々の経験に依拠して日本人引揚者の苦難を強調する研究などが蓄積されてきた。これに対し本論文は、戦前戦後の連続性、背景の異なる様々な引揚者の実態、引揚者の地域的特性や社会的属性を視野に入れた分析の必要を指摘し、引揚者の戦後日本社会への統合され方を明らかにする必要性を強調した。

第 1 章は、戦前、戦中期における樺太アイデンティティ、独自文化の創出をめぐる言説を、当時の刊行物を実証的に検討し、世代間、産業団体間のとらえ方の相違を指摘し、こうした考え方が戦後にも継承され樺太イメージが再構成されるという連続性を指摘した。

第 2 章は、戦後の様々な引揚団体が刊行していた新聞を分析し、「樺太引揚者」という言葉の形成過程を考察した。戦後直後には様々な引揚団体が存在していたが、その後、戦前の樺太の指導者が引揚団体においても主導的な役割を担うようになる変遷過程を考察した。

第 3 章は、占領軍による引揚政策とその変容を、先行研究および一次資料を用いて考察し、共産主義の影響が引揚者を通じて国内に浸透する事態を警戒し、SCAP によるアメリカの人道主義の強調、メディアを通じての世論の誘導、引揚者団体の日本政府へのロビー活動を実証的に説明した上で、SCAP による引揚者に対する行動と日本人の引揚者の経験が不可分の関係であったと結論付け、SCAP による引揚政策の地域的差異を、樺太を事例に明らかにした。

第 4 章では、1950 年代に北海タイムス紙上で連載された戦前戦後の樺太の実情を伝える記事に焦点を当てた考察を行い、その後確立する「樺太引揚者」とは異なる見方や、戦前の樺太指導者に対する批判的な言説が存在していた事実を指摘した。

第 5 章では、稚内市における樺太引揚者の慰霊碑が建立される過程を考察し、市内の引揚団体と市長が協調的な関係を形成する実態を解明し、地方のレベルにおいても、「樺太引揚者」イメージを形成するために、引揚団体と市の権力者、戦前樺太の指導者経験を持つ市の幹部との関係構築が重要であったことを実証的に示した。

第6章では、戦後の「樺太引揚者」イメージ確立に重要な役割を果たした「樺太終戦史」の編さん過程を考察している。同書には多くの引揚者の体験が集められているが、その中でも戦前の樺太指導者層が中心となって編さんされた経緯を明らかにした。

本論文の意義は、第一に、1次資料を丹念に検討し、樺太の引揚者団体の形成過程、運動方針の変化、指導者層の対立を浮かび上がらせ、樺太引揚が同質的ではない実態を指摘し、「樺太引揚者」というイメージはその後の政治的、社会的な状況の中で次第に形成された過程を明らかにした点にある。第二に、大半の引揚の先行研究は、終戦以降の時代に焦点を当てているが、本論文は戦前の樺太における言論空間の状況を実証的に検討したうえで、戦前樺太の指導者層が引揚団体と国や地方自治体関係者との公式的・非公式的な関係の媒介者となっている役割や、戦前の樺太イメージを戦後においても継承するなど、戦前戦後の連続性に注目することの重要性を示している。第三に、引揚団体におけるアイデンティティ形成の政治的な側面を明らかにした。従来においても引揚団体は研究対象とされてきたが、多くは支援や補償を求める圧力団体としての活動が注目されてきたが、本論文は引揚者のアイデンティティ形成において果たしてきた役割の重要性が強調されている。

本論文は以上のような意義を有しているものの、以下のような課題も指摘された。第一に、第3章までが主として「樺太アイデンティティ」形成をめぐる議論を中心としているのに対して、第4章以降は「歴史の記憶」をめぐる叙述に重点が置かれており、論文全体の一貫性、各章のバランスを考慮するとともに、全体を構成する分析視角を明確にする必要がある。第二に、戦前の植民地エリート層が、どのような意図に基づいてどのように「樺太アイデンティティ」を形成したのかに関して、当時から顕在化していた多様な思想や立場の相違・背景を含めて説得的に叙述する必要がある。

しかしながら、本論文の意義はこうした課題を大きく上回っており、また、今後、理論面の研究や、論文執筆の過程で蓄積されつつも今回の博士論文では利用されなかった多くの引揚者のオーラル・ヒストリーの活用など、今後の研究を発展させる可能性を大いに持っていることから、審査委員全員で合格との結論に至った。